1997. 9. 30

(Japanese Academy of Learning Disabilities)

日本LD学会会報 第22号

JA LD

事務局：東京学芸大学心理学研究室内 〒184 東京都小金井市貫井北町4-1-1
TEL&FAX. 0423-27-2890

成人期ＬＤの適応

福岡教育大学障害児教育科
納　富　恵　子

地方都市で、発達障害の診断を行っている筆者のもとに、ある報道機関から突然の取材の申しこみがあった。ＬＤ講演会での筆者の話を聞き、ＬＤに関する企画が持ちあがったという。取材当日カメラマンを待ちながら、記者の方（Ｍさんとする）と打ち合わせをするうち、Ｍさんの子供時代に話が及んだ。

Ｍさんは、小学生時代にひどいいじめに合っており、その原因がＬＤのためだったかもしれないというのだ。「小学校入学後、先生の授業中の言葉の意味がわからず、うつむいて教科書ばかりながめていた。算数は九九でつまづき、成績は極端に悪かったが、社会科は好きだった。」診断や評価は何も受けていないが、聴覚的な理解に問題があるＬＤ圏内の能力の障害が疑われるエピソードが語られた。能力の高さもあっただろうが、どんな時にも、両親が彼の良さを認め、励まし続けてくれたこと、中学の校長自ら、算数の個別指導にあたってくれたことが、進学への道を開き、大学卒業後、記者として実力を認められ、管理職の立場にあるという。趣味も多彩である。

彼の許可を待てこの話を引いたのも、ＬＤの成人期について示唆を得ることが多いからだ。相談機関で働く者にとって、成人期に初めて発見されたＬＤを持つ大人は、適応に問題がある方がほとんどである。したがってＬＤの成人期は、不適応ばかりという印象を持たれやすい。しかし、米国の研究も示すように、最近では、就労に関しても良い自己イメージを持ち、適した職についている人であれば、ＬＤによる不利は少いことがわかってきている。Ｍさんは、その２つの条件をみたした方といえよう。

診断も評価も治療教育も、ＬＤに関してはさらに充実する必要がある地方の現状だ。だが、ＬＤを持つ人が、理解され励まされていると実感し、自分の人生を歩んでいけるという自信を持てるかは、ユニークな彼らの存在を受けとめる親や教師の力量による所も大きい。「ＬＤの人に役立つなら実名でいいですよ。」と笑顔で語ったＭさんを育んだ地方の素晴しい人々から学んだ１日だった。